Knight at arms を巡って

永　井　豊　実

—and the earlier and better version restored—

(Sydney Cockerell)

序

1995年はキーツが生まれてから丁度200年になる。イギリスやアメリカで，キーツ生誕200周年記念行事が開催された，と『英語青年』12月号に報告されていた。その特集：ジョン・キーツ（生誕二百周年記念）の中で，マックガン氏が編集した *The New Oxford Book of Romantic Period Verse*（Jerome J. McGann, Oxford UP., 1993年）の中の *La Belle Dame Sans Mercy*（Merciにあらず）は，“O, what can ail thee, knight at arms,” ではなくて，“Ah, what can ail thee, wretched wight,” で始まっており，初期に採用された *The Indicator* 版のものになっていると指摘されていた（『キーツ批評最近の動向』，石幡直樹氏）。この knight at arms か wretched wight かという問題は，これまで熱く論議されてきているようである。たいていの人は中世的，ロマン的，magic 的な魅力を持っている knight at arms の方を好んでいる。wretched wight の方は字（句）が多少違っており，5と6連の順序も逆になっている。このどちらを選択するかは，編者の好みや解釈の違いによって生じたものであって，これは偏にこの詩の内容が不可解であったり，曖昧であったりするためである。そこでこの詩について手元のキーツ詩集やキーツ研究版に当たってみて，拙論「『つれなき美女』のロマンス」（以下，『ロマンス』）で言及できなかったものを考察してみたい。

(i)

キーツが書いたこの詩は，先ず弟ジョージ夫妻に宛てた手紙（1819年4月21日か28日）に書かれたもので，これを書き写した（JK copy）後，弟夫妻に手紙を送った。この手紙の草稿（JK letter draft）がロリンズの Letters (H.E. Rollins, *The Letters of John Keats,* Harvard UP., 1958) にあるものとされている。最初の JK コピーはブラウン（Charles Brown）とウッドハウス（Richard Woodhouse）によって書き写された。ところが，この JK コピーは

無くなってしまい，ブラウンとウッドハウスのものが‘A Ballad’とサブタイトルを付けられて残った。恐らくブラウンのコピーをもとにして，ミルンズ（Richard Monckton Milnes）は1848年に出版した *LIFE, LETTERS, AND LITERARY REMAINS, OF JOHN KEATS* (Edward Moxton, Vol.II, pp.268−270）の中に，この詩を載せた。こちらはknight-at-armsとなっており，punctuationはミルンズかブラウンの手の入ったものなので，これは別にすると，字（句）はほぼロリンズ版と同じである。ところが，これまた恐らくブラウンの書き写しをキーツ自身がハント（Leigh Hunt）の *The Indicator* に渡したらしい。このIndicator版が1820年5月10日に出版され，wretched wightと始まっており，幾つかの点で手紙の草稿とは違ったものであった［Jack Stillinger, *The Texts Keats's Poems,* Harvard UP., 1974. pp.232−4］。これがいろいろと類推されているのであって，ハントの指図で変えたとか，キーツが疲労や倦怠のために変更を黙認していたとか，読者が分かってくれないので，‘Caviare’という匿名にしたとか，といった風に憶測されている（Sidney Colvin, *John Keats,* Charles Scribner's Sons, 1917, p.469)。これがために，キーツの心的状況，社会的状況がwretched wight（みじめな人）として，この詩に汲み込まれているものだと解釈されている。またシェークスピアの言う，

> ‘For the play, I remember, pleased not the million; 'twas caviare to the general: but it was...an excellent play.’ (Hamlet. II, ii. 456−60)

として，「キャヴィアは一般大衆にとっては貴重なものなので，めったに口にできないものだから，その味は分からない。本当は素晴らしいものなのだが」と，キーツが時の文学風潮を揶揄したものだ，とかいう解釈になっているように思える。とにかくIndicator版のようになったいきさつはよく分かっていない。しかし，「最初に発表され，まだキーツ自身が生きている間に出版されたものだから尊重されなければならない，という理由だけではこじつけに過ぎない」，とコルヴィンは言う。やはり中身であって，

(1) knight-at-armsをwretched wight
(2) sigh'd full soreをsighed deep
(3) wild wild eyesをwild sad eyes
(4) with kisses fourをso kiss'd to sleep
(5) And there she lulled me asleepをAnd there we slumber'd on the moss

に変えてしまうと味もそっけもない，と続けて言っている。キーツがキャヴィアとして皮肉って匿名にしたのも，あまりにも自分の意図したものとはかけ離れたものになっているので，自分の名前を出したくなかったのであろう。キーツの意図していたものは，やはり弟ジョージ夫妻に送った草稿にあった。幸い我々にはロリンズ版があり，これには句読点やハイフンが少なく，まだ色の付ついていない素地が残っている。固有名詞が大文字になっているところが目に付くが，

それにはそれなりのキーツの意図が汲み取られるところがある。ここで整理しておくと，1) キーツの手紙の草稿がロリンズ版系統であり，フィニーはほぼこれを使っている。2) ブラウンのコピーがミルンズ版系統であり（Woodhouse コピー，W1，W2 については定かでない），ギッティングズ，ヴァッサーマンがほぼこれによっている。3) Indicator 版系統がドール（Nathan Haskell Dole, Virtue & Company, Vol.IV, 1904）やマックガンになっている，ということが分かる。なおフォアマンは草稿と Indicator 版の両方を載せている（H. Buxton Forman, *The Poetical Works and Other Writings of John Keats.* Phaeton Press, 1970）

(ii)

今回マックガン氏が提出した問題は，キーツの手紙の草稿がいかに考え抜かれて練り合わされているものなのか，簡潔な表現の中にいかに深い意味が込められているのか，を考えさせるきっかけになった。以下それぞれ思い当たるがままに問題点を解明していきたいと思う。

(イ) 先ずタイトルであるが，マックガン氏の La Belle Dame Sans Mercy がフランス語の Merci となっていないのは，恐らく校正ミスか，或いは The Eve of St. Agnes (l.292) の "In provance called, 'La belle dame sans mercy'" によったものではないか，あるいはこれまた校正ミスか，と思わざるを得ない。キーツの草稿の綴りもそうなっているので（Ed. Jack Stillinger, *John Keats Poetry Manuscripts at Harvard A Fascimile Edition.*, The Balknap Press of Harvard UP., 1990, p.120)，キーツ自身もフランス語の merci を無意識のうちに，英語書きにしていたのであろう。しかしロリンズ版によるならば，この詩はフランス式のタイトル，La belle dame sans merci になっている。それぞれの使い方や意図によって（手元にある版だけでみると），

La belle dame sans merci (Bate, Cook, Finny, Gittings, Rollins)

La Belle Dame sans Merci (Colvin, Harmon, Stillinger)

La Belle Dame Sans Merci (Allot, Wassermann)

LA BELLE DAME SANS MERCI (Garrod, Milnes)

となっている。ベイト（W. Jackson Bate）やフィニー（Claud Lee Finney）等はロリンズ版によっているので，フランス式が分かっていたのであろう。

キーツは当初副題を付けていなかった。A Ballad と副題が付けられたのは，ブラウンとウッドハウスによるものだとされている［Jack Stillinger, *The Texts of Keat's Poems,* Harvard UP., 1974, p.233］。

(ロ) 第 1 連の "O what can ail thee knight at arms" において，冒頭の "O" には，

"O" (Bate, Colvin, Cook, Finny, Harmon, Gittings, Milnes, Rollins, Still-

inger, Wasserman)

"O," (Garrod)

"Oh" (Allot)

"Ah," (McGann)

がある。"O" は驚きの意味が入っており，what で「どうして，そんなに」という疑問が沸いて出てくるので，2行目の loitering ? の疑問符と繋がってくる。ギャロッドが "O," で切ったのは，ここで余情を持たせ，what can... と「強弱」にして，最後を knight-at-arms と「強弱強」とまとめる意味合いを持たせている。"Oh" も同じである。"Ah," は詠嘆的で wretched wight と呼応し，同情的であるので，2行目の "Alone and palely loitering;" の最後が " ? " にならなく，" ; " になって，第2連目にもっていっている。通常のバラッドをみるならば，"O" になっているのが多い。

(ハ) knight at arms において，knight-at-arms と "-" があるもの（Allot, Bate, Colvin, Finny, Garrod, Milnes, Wasserman,）と無いもの（Rollins, Stillinger）とがある。ハイフンのある場合は「武具甲冑を着けた騎士」ということで，視覚的に鎧の金具をイメージできるかもしれないし，纏まった感じを持たせて，thee の後にコンマを置いて，O what can ail thee, knight-at-arms, と同格的に一語にして，「お前を悩ましているのは何なのか，鎧の騎士よ」と呼びかけの感じを出している。

ハイフンが無い場合は，リズム的に thee knight at arms「弱強，弱強」となり，thee と knight とが繋がり，at arms もくっついて，「お前，騎士よ，武具甲冑を着けて強そうなのに」というニュアンスが出てくる。ハイフンの無いのはロリンズ版なので，キーツは付けるのを考えていなかったのではないかと思われる。しかし口調的には「強弱強」の方が響きの強さが出てくるのと同時に，2行目の loitering とも「強弱強」と呼応するので，スティリンジャー（Jack Stillinger）版の ' , ' を入れて切り，

O what can ail thee, knight at arms,

Alone and palely loitering ?

が事情を汲み込んでいるのではないかと思われる。しかしミルンズ系統を引くものである knight-at-arms を採用している編者が多いのは，おそらく視覚的，リズム的な面からであろう。

こうした punctuation 等を一々取り上げていくと，皆それぞれどこか違っている。これは編者の好みや解釈の相違によるものなのであって，それぞれの版を知ることによって読者はそこから色々な読み方を学ぶことにもなる。ヘレン・ヴェンドラー（Helen Vendlar）氏が「草稿は唯一権威のある原典であるし，また一方多種多様に存在する編集版の最良のテキストにもなっている」（Ed.Jack Stillinger, op. cit.）と言っているのは，編者の意図によって版はまちまちで

あるので，原典にあたることがまず必要なのであるということである。

(二) knight at arms なのか wretched wight なのかに関しては，『ロマンス』を元にして話を進めてゆきたい。そこにおいては，美女を『アーサー王物語』の中の王妃ギネヴィアとし，騎士をランスロットとした。

ランスロットが 18 歳の時に騎士としての称号を得るために，ニミュエに連れられてアーサー王と謁見し，騎士 Knight の称号を得るのである。そして Sir Lancelot du Lake「湖のランスロット卿」と称し，円卓の騎士として武勇を馳せるのである。従ってここで十分 Knight が利いてくるのである。wight では何だか分からないし，何の関係も無くなってしまう。フィニーやハーモン（William Harmon, *The Top 500 Poems*, Columbia UP., 1992）版では Knight と K が大文字になっている。ロリンズ版では k が小文字になっているが，ロリンズ版の後の流れに従ってここでは大文字にしたのではないかと思われる。何故ならハーモン版もフィニーと同じく，ロリンズ版をほぼ踏襲している。ロリンズと同じように，大文字を拾っていくと，

Lake, Knight, Squirrel（フィニー），Withereth（ロリンズ），Lady, Meads, Garland, Zone, Kisses（フィニー），Woe（ロリンズ，フィニー），Kings, Princes, Lake,

となっている。そうすると何故大文字にしているのだろうかという疑問が沸いてくる。キーツが草稿でそう書いていたならば，まさに『アーサー王物語』を暗示していたとしか取れないのである。Sir Lancelot du Lake の Lake, Knight になって Sir の称号を得たことの Knight が先ず暗示されている。さらに王妃ギネヴィアは La Belle Dame「美しい夫人」であり，Lady「淑女」なのである。詩行の中では小文字の方が自然な感じがするので，各編集者の版は小文字でも良い。しかしロリンズに戻って，大文字の意味が何であるかを知るのも大切なことかもしれない。

また knight at arms の代わりに wretched wight「みじめな人」にしたら，Knight と Lady のこの物語が読み取れなくなってしまう。マックガンの *The Indicater* 版はキーツの意図していたものとは違うニュアンスを持ってしまうのである。キーツの社会的状況，肉体的状況において，惨めであったと 1 年後の出版の時にリー・ハントか誰かがそう思ったとしても，これを書いた時（1819 年 4 月）はそんなことは微塵も考えていなかったのではないか。あの地獄の第 2 圏の夢を見た時の，イザベラ・ジョーンズ夫人とのことがまだ想いに浮かんできてならなかったと思われる。そうするとキーツは恐らくこの詩をいつまでも不可解なままにしておきたかったのかもしれない。

(iii)

この詩の第1連から第3連までの持つ暗示もいろいろと深い意味を持っている。第1連と第12連とはほぼ同じものとなっているが，最後まで読んで味わってみると，どこかニュアンスが違ってくるのである。それは何にあるのだろうか。

ところでこの詩の edition の中で幾つか違っている語（句）があり，特に気になるのが3つある。その1つは，

(1) The sedge has withered from the Lake. (I,l.3)
Though the sedge is wither'd from the Lake. (XII,l.3)
(underline mine，以下同じ)

であって，その違っている組み合わせは，

1連3行目——12連3行目
has——is (Bate, Cook, Finny, Harmon, Milnes, Rollins, Stillinger)
has——has (Allot, Garrod, Gittings, Wassermann)
is——is (Colvin, Mcgann,)
is——has (無し)

である。そして次は第9連と第11連の，

(2) On the cold hill side (IX, l.4)
On the cold hill's side (XI, l.4)

であって，その違っている組み合わせは，

hill———hill (Colvin, McGann)
hill———hill's (Allott, Cook, Finny, Garrod, Gittings, Harmon, Rollins, Wasserman)
hill's——hill's (Milnes, Stillinger)
hill's——hill (無し)

である。3番目に違うのは，第10連の，

(3) Thee hath in thrall. (X, l.4)

であって，その順序の組み合わせは，

Thee hath (Allott, Cook, Finny, Rollins)
Hath thee (Bate, Colvin, Garrod, Gittings, Harmon, McGann, Milnes, Stillinger, Wasserman)

である。

2番目の hill と hill's については『ロマンス』の中で述べた。hill—hillよりも，—hill's の方が強調的な意味合いが入っていて，円卓の騎士たちが死んでいったその丘が強調される。hill's—hill's で，ミルンズが採っているのが気になる。スティリンジャーはミルンズ版を踏襲しているので，ほぼ同じである。

3番目の問題であるが，多くの研究者は Hath thee を採っている。thee in [ðíːín] と韻を踏んでいるのと，hath を keep 的な意味で目的をとらせる文法的な語順と，「弱強」としての thee「騎士」を強調する方を選んだのであろう。Thee hath の方は hath in thrall となって，「虜にした」が多少強く出てくる。th の発音の順序が入り乱れるので発音しにくくなる。その点 Hath thee in thrall の方が滑らかな感じがする。しかし，ロリンズでは Thee hath となっていることは何か意図があると思う。口調は滑らかではないが，hath に強調を置いて，「虜にした」ことで，ランスロットがギネヴィアにかけられたた愛の魔術によって，円卓の騎士たちの崩壊がもたらされてしまったことを強調しているように感じられる。

さて1番目の has—is の問題である。

第12連のロリンズ版のキーツの誤字を直して書くならば，

Though the sedge is wither'd from the Lake
And no birds sing——....

「こういう訳で，一人青ざめ，彷徨って，ここに留まる次第。湖のスゲは枯れ，鳥は歌っていないけれど。」と言って，騎士がこれまでの経緯を語る。アーサー王も，ギネヴィアも，そして円卓の騎士たちも今は皆死んでしまった。ところが自分は

And I awoke and found me here
On the cold hill's side.

と再び目を覚ましてしまったのである。それも死者たちの眠る丘の上にいるのだと言っている。死者たちの眠る墓穴から迷い出てしまったのである。こういう経緯が「今は枯れ果てているけれど」となっていて，is として表れている。

第1連では，誰かが足どりも重く彷徨う悩める騎士に尋ねるのである。これは誰か第3者の見方が入っている。「晩秋の荒涼とした所を，何で彷徨っているのですか。鳥も鳴いていないし，リスたちも収穫を終えてしまったというのに」，と第3者の立場から聞いているので，目の前の感じから has が活かされているように思われる。

has—has は同じ語の繰り返しの方がバラッドとしての繰り返しで，詩の統一制を保っているのではないか，という意味で使われているように思われる。is—is も同じである。話す人が違うことを考えた場合，has—is でもいいのかもしれない。

(iv)

ここで pale の問題がある。第 1 連では Alone and palely loitering といって pale に -ly を付けて，l の舌のまつわりで足取りも重く歩いている感じを効果的にだしている。まだどうして青白いのか分からない。話を聞いていくうちに，第 10 連になって青白い騎士たちの姿を見たというのである。

I saw pale kings and Princes too
Pale warriors death pale were they all

まさに死者たちの青白い顔であった。『ロマンス』で述べたように，ギネヴィアとランスロットとの恋のために死んでいった円卓の騎士たちの顔であった。

第 9 連で「美女は子守歌を歌って私を眠らせた。そしてそこで夢を見た。」愛の夢を見たがために，罪を犯してしまったのである。そして罪の意識を覚えるのである。同時にそれが円卓の騎士たちの夢でもある。それが "Ah Woe betide !"「災いなるかな」である。ここで大文字になっているのも罪の意識を暗示している。罪の意識に目覚めたことによって，her elfin grot「妖精の洞窟」，つまり王宮から死者たちの眠る the cold hill side「冷たい丘の斜面」，つまり戦場地であり墓地に変わってしまったのである。これは話の筋からすると相当な時の経過がある。第 10 連，11 連によって，死者たちの恨みのこもった叫び声が響くのである。「つれなき美女がおまえを虜にしたぞ」と。その虜のために自分たちは死んだのだと。そして円卓の騎士たちの崩壊をもたらしてしまったのだと。そういう恐ろしい警告を発する夢を見るのである。騎士にとっては全てが夢となってしまったのである。そして

And I awoke and found me here
On the cold hill's side

と「目が覚めてみたら，冷たい丘の斜面にいるのだった」と言う。

第 1 連の palely は何か恋に悩んでいるのではないかと思わせる。美女と騎士の愛の物語を読んでいくうちに，次第に地獄の第 2 圏の世界を想像させるものとなり，罪の意識がそこで感じられる。しかし「アーサー王物語」においては，二人とも改悛してしまうので，罪の意識が薄れてしまう。騎士の悩みは，王と王妃に対して「不親切」(unkyndenes) であったことが心に重くのしかかっていたのである。騎士の palely の白さは死者の青白さを帯びた亡霊のように覚えるのである。ロリンズ版には

I see a 〈death's〉 lilly on thy brow

とか

And on thy cheeks a 〈death's〉 fading rose

となっているのは，死者の青白さを想像していたのであろう。loitering と西洋の亡霊は歩いていてもよく，sojourn の中にこの世の未練があるようにも思われる。第 12 連まで読んで第 1 連に戻る時，ニュアンスが違ってくると言ったのは，この亡霊的な感じが残されているからである。それが The sedge has withered from the lake. でこの世に戻るのである。スゲや鳥は騎士も使っているのでまだ同じ雰囲気であるが，リス（squirrel）が現実的な感じを持たせている。

（v）

(イ) 大文字についての説明が少し残っている。

Meads であるが，ギネヴィアは白蛇の精であった。I met a lady in the Meads「野原で淑女に会った」ということは，本来は王宮でランスロットがニミュエに連れられてアーサー王に騎士の称号を得る時に初めてギネヴィアに会うのであるが，王妃が白蛇の精ということなので野原をもってきているのである。

A Garland for her head は王妃の王冠を想像してもよい。

Fraglant Zone はガーター肩章を表しているが，ヴィヴィエンがマーリンに帯を使って九重の魔術の円を描いて眠らした時の帯を思い起こす。

Kisses four は心を込めたキスということで，ガラハルトの恋の取り持ちによる first kiss を思い起こす。

Squirrel は物を貯えるリスということで，収穫のイメージにつながっている。

Kings や Princes はアーサー王の円卓の騎士たちを指している。

(ロ) アーサー王物語が分かっていると，Indicator 版の書き直し字句がいかに合わないかが分かってくる。コルヴィンが先に挙げていたものを見てみると，

(1)の knight-at-arms と wretched wight は既に述べた。

(2)の she wept and sigh'd full sore を she gaz'd and sighed deep となっていることについては，ギネヴィアの想いが死ぬほどの思いつめたものであった。単なる deep では普通の恋の想いしか出てこないのであって，張りつめたものがない。

(3)の wild wild eyes を wild sad eyes にしたら，「妖しい，妖しい目を閉じた」という，片目，片目にゆっくりと想いを込めてキスをするニュアンスが出てこないのである。そして sad eyes にしたら妖しい魅惑的な感じが出ず，蛇の野性的な目の感じも失われてしまう。

(4)の with kisses four で心を込めてキスをするのであって，So kiss'd to sleep でこの場で眠らせてしまったら困るのである。次の

(5)の And there she lulled me asleep で初めて美女が愛の子守歌を歌って眠らせるのであ

る。And there we slumber'd on the moss では「子守歌を歌う」という意味がどんな意味を持っているかが失われてしまう。愛の魔術をかけたのである。「苔の上で眠る」では『真夏の夜の夢』のような雰囲気になってしまい，とても張りつめた甘美な罪の意識は出てこないのである。キーツ自身も地獄の第2圏の夢を見ているくらいだから，妖しい場面なのである。そうすると Indicator 版が字句を変えたのも，ここの妖しい場面に危険を感じ，モラル上の意味からぼやかしたのではないかとも考えられる。

(ハ) ロリンズ版の第5連と第6連が Indicator 版では逆になっている。ロリンズ版の第5連は I made a Garland for her head,...「頭には花冠を，そして腕輪も香り漂う帯まで作ってあげた。愛するように私を見ては，甘いうめきの声をもらすのであった。」となっており，第6連が I set her on my pacing steed...「美女を白馬に乗せて歩ませたが，一日中彼女の他には何も目に入らなかった」となっている。それが Indicator 版では逆なのである。第5連は前後関連が無くてもよいので，どこに入れてもよいようである。しかし『アーサー王物語』を読んで話の筋を追ってみると，ロリンズ版の順序の方がいいのである。ランスロットの Knight の叙任式の時に二人が初めて出会って，ランスロットが王妃に忠誠と愛を誓うのである。そして美女を白馬に乗せて歩ませるということは，王妃との付き合いが始まることである。従ってロリンズ版の5と6が逆になっていたら話の筋が違ってしまう。

(vi)

この詩では「白」が目立っていると述べた。クレチアン・ド・トロワの詩句にも「白」が散りばめられているとルグイが述べていた。この詩では lilly と pale とが白さを代表している。そしてすぐに色あせていく rose の赤も一瞬光っている。

I see a lilly on thy brow,
With anguish moist and fever dew.

と騎士の額にユリの白さを認める。それも苦悩と熱とで血の気の失せたように白くなっている。

And on thy cheeks a fading rose
Fast Withereth too—

において，バラの赤は物語からして愛であることが分かる。愛は直に冷めてしまうのが慣わしで，fading rose と形容が付くほどである。ギネヴィアとランスロットの愛は長い間純潔であった。しかし一旦ギネヴィアの愛の魔術がかけらてからは，円卓の騎士たちが崩壊してしまう。ギネヴィアはあまりにも自らの罪の大きさを知って改悛し，ランスロットに対してつれなくするのである。ユリの白さは純潔や苦悩を示し，バラは愛を象徴している。

(vii)

以上考察したように，マックガン氏の採用した *The Indicator* 版の詩はいかにキーツの意図したものとかけ離れていたかが分かる。味もそっけもないとコルヴィンが言うように，Indicator 版だけの詩を読んでいたならば，本当の意味は分からない。せめてフォアマンのように，二つを挙げるならまだ分かる。Better Version はやはり弟ジョージ夫妻に送られた草稿で良いのである。

これまでこの詩は，スペンサーの『妖精の女王』の物語のように読まれていて，苦悩を帯びた騎士の愛の物語として，神秘的な世界に引きずり込んでいる。しかしそれだけではなにか曖昧な，不可解なものが残っている。踏み込んではならない妖しいものがあり，それでいて惹きつけるものがあるのは，あまりにもキーツ的なものがあったからである。『アーサー王物語』を読み，「ランスロットとギネヴィア」の物語を読んで，この詩の意図を汲み取ってみるならば，バイロンの『マンフレッド』に比するものが秘されており，更に広がりのある魅力を帯びた詩となっていて，ロマン派英詩中の，あまりにもロマン的な詩として輝いているのである。

La belle dame sans merci

I

O what can ail thee, knight at arms
  Alone and palely loitering ?
The sedge has wither'd from the Lake
  And no birds sing !

II

O what can ail thee knight at arms
  So haggard and so woe begone ?
The squirrel's granary is full
  And the harvest's done.

III

I see a lilly on thy brow
  With anguish moist and fever dew,
And on thy cheeks a fading rose
  Fast Withereth too—

IV

I met a Lady in the Meads
  Full beautiful,a faery's child
Her hair was long, her foot was light
  And her eyes were wild—

V

I made a Garland for her head,
  And bracelets too, and fragrant zone
She look'd at me as she did love
  And made sweet moan—

VI

I set her on my pacing steed
  And nothing else saw all day long
For sidelong would she bend, and sing
  A faery's song—

VII

She found me roots of relish sweet
And honey wild, and manna dew
And sure in language strange she said
I love thee true—

VIII

She took me to her elfin grot
And there she wept and sigh'd full sore
And there I shut her wild wild eyes
With kisses four.

IX

And there she lulled me asleep
And there I dream'd—Ah Woe betide !
The latest dream I ever dreamt
On the cold hill side.

X

I saw pale kings and princes too
Pale warriors death pale were they all
They cried La belle dame sans merci
Thee hath in thrall.

XI

I saw their starv'd lips in the gloam
With horrid warning gaped wide
And I awoke and found me here
On the cold hill's side.

XII

And this is way I sojourn here
Alone and palely loitering;
Though the sedge is wither'd from the Lake
And no bird sing——

[Rollins 版より]

参考文献

Allot, Miriam (ed.): *The Poems of John Keats* (Longman, 1977).

Bate, Walter J.: *John Keats* (Harvard University Press, 1963).

Colvin, Sidney: *John Keats His life and Poetry His Friends Critics and After-Fame* (Charles Scribner's Sons, 1917).

Cook, Elizabeth (ed.): *John Keats* (Oxford University Press, 1990).

Finney, Claude Lee: *The Evolution of Keats's Poetry* (Russel & Russel, 1963).

Forman, H. Buxton (ed.) and Forman Maurice Buxton: *The Poetical Works and Other Writings of John Keats,* vol.4 (Phaeton Press, 1970).

Garrod, H. W. (ed.): *Keats Poetical Works* (Oxford University Press, 1972).

Gittings, Robert: *John Keats: The Living Year* (Heinemann, 1971).

Gittings, Robert: *John Keats* (Heinemann, 1980).

Harmon, William: *The Top 500 Poems* (Columbia University Press, 1992).

McGann, Jerome J. (ed): *The New Oxford Book of Romantic Period Verse* (Oxford University Press, 1993).

Milnes, Richard Monckton: *LIFE, LETTERS, AND LITERARY REMAINS, OF JOHN KEATS,* vol.II (Edward Moxon, 1848)

Rollins, Hyder Edward: *The Letters of John Keats,* vol.2 (Harvard University Press, 1980).

Stillinger, Jack: *The Texts of Keats's Poems* (Harvard University Press, 1974).

Stillinger, Jack (ed.): *the Poems of John Keats* (Heinemann, 1978)

Wasserman, Earl R.: *The Finer Tone Keats' Major Poems* (Greenwood Press, 1967).

斉藤　勇：*Keats' Poems*　研究社小英文叢書（研究社，昭和 34 年）。

高橋雄四郎：キーツ研究　自我の変容と理想主義（北星堂書店，昭和 52 年）
中野好夫，朱牟田夏雄，平井正穂（編集）：斉藤　勇著作集，第四巻，イギリス文学論集 I（研究社，昭和 53 年）。
平井正穂：イギリス名詩選（岩波書店，1990 年）。
松浦　暢：英詩入門（吾妻書房，1982 年）。
山内正一：キーツ研究―物語詩を中心に―（昭文堂印刷所，1986 年）。